

その威厳を喪失する。難破はそのまま軍隊組織そのものの破壊の提喻となる。裸で役に横たわる男たちは、すでにその地位を剥奪され、社会的な体面も失っている。orderの失効。軍隊における命令系統の破壊と、等級の混乱は、そのまま社会的秩序の壊滅を暗示する。ところが絵画じたいは、完璧に調和のとれたピラミッドの構図を描いていて、惨状を物語る説話的構造とは露骨なまでに矛盾する。

この矛盾のうちに歴史の嵐と、画家の運命とが浮き彫りとなる。ナポレオンの没落は、戦争画という特権的なジャンルの危機と直結した。その末路こそ「軍隊指揮偏執狂の男」の、もはや社会的には「肖像」の主体たることを許されぬ狂人の写生だろう。「言語と映像」「映像と絵画」「伝統と欲望」の3部作で囿固たる地位を築き、卓越した静物画論「看過されしものを見る」を刊行した著者は、次作では日本文化論を予定していると聞く。

Norman Bryson et al. Visual Culture, images and interpretations, Wesleyan U.P. 1994.

【訂正】前回2257号の見出しで「アルパオンス」とあるのは「アルパース」の誤りでした。訂正してお詫びします。(編集部)

イメージとその解釈

ノーマン・ブライソンの最近の仕事から

稲賀繁美
Inaga Shigemitsu
三重大学・ソノニンメニキ

アーノルド・シュワルツネッカーの肉体は何を意味しているのか。隆起した肉体の固まりは、ずばり隔物の代理品、それも隔物を隠蔽するための隔物の換喩ではないか。フランス新古典主義を代表する画家ジェリコーを論ずるはずのノーマン・ブライソンのテキストの冒頭には、そんな一見とんでもない枕が擬られる。男らしさの表象としてポディールは、筋肉によって男性自身を文化的に覆い隠す。では、ナポレオンの時代なら、この筋骨隆々の「肉体」に当たるものは何だったろうか。さまざまな意匠を凝らした華美な軍服こそ、当時の「男らしさ」を隠蔽する代替品ではなかったか。それぞれの軍服は階級によって微細に区別されていて、それを纏う兵の現在の地位や過去の履歴すら瞬時に見分けられる。軍服に包まれた主体は、ある地位にある主体、いやある地位を具現した主体なのだ。かくして個々の肉体corps physiqueは軍隊corps militaireへと拡張し、その栄光corps glorieuxに貢献することで、消滅する。集団的肉体は、国家の生物学的な実質と化す。

この軍隊の栄光が敗れた姿を容赦なく晒すのが、超大作「メドゥーサ号の筏」だ。栄光の化身はちりちりに軍服を剥ぎとられるや、